



第46回

「ごはん・お米とわたし」

作文・図画岩手県 コンクール作品集



 JA岩手県中央会



さあ、みんなで取り組んでいこう。
やっぱり国産農畜産物推進運動
～みんなのよい食プロジェクト～

発行/令和4年2月2日 企画・編集・発行/JA岩手県中央会 印刷・製本/川嶋印刷株式会社

目次

◆ごあいさつ	1
JA岩手県中央会 代表理事会長 小野寺 敬作	
◆図画部門入賞作品	2
◆作文部門入賞作品	9
◆総評	16
審査委員長／元岩手県教育委員会教育委員長 八重樫 勝	
◆図画部門を審査して	16
盛岡市立下橋中学校 指導教諭 佐々木 俊江	
◆作文部門を審査して	17
盛岡市教育委員会学校教育課 指導主事 山下 るり子	
◆コンクール入賞一覧	18
◆コンクール概要	22

図画・作文各部門

- 1部：小学校1～3年
- 2部：小学校4～6年
- 3部：中学校1～3年



じえい いわわて けんちゅうおうかい
J.A.岩手県中央会

だいいりゅうり じかいちよう
代表理事会長

おの であら
小野寺 敬作

第46回「ごはん・お米とわたし」作文・図画コンクールに、県内各地から作文108点、図画226点もの力作が寄せられました。ご応募いただきました小・中学生の皆さん、とても素晴らしい作品をありがとうございました。

そして、たくさんの応募作品の中から見事に入賞された皆さん、本当におめでとうございます。

また、全国コンクールにおいても、作文部門1点、図画部門1点が優秀賞に選ばれました。心からお祝いを申しあげます。

このコンクールは、次世代を担う小・中学生の皆さんに、日本の豊かな食卓と国土を作りあげてきたごはん・お米、そして稲作をはじめとする農業についての学びを深めてもらうため、JAグループが昭和51年から実施している取組みです。

これをきっかけに小・中学生の皆さんが、家族で食卓を囲むことの幸せを感じたり、お米を作る農家の思いを知り、自分たちが暮らす地域農業について考えたことは、とても貴重な経験となったのではないのでしょうか。

皆さんから寄せられた作品を拝見いたしますと、米作り・稲作体験

を通した苦労や楽しみ、家族で食事を作る様子、ごはんをおいしそうに食べる姿、美しい田んぼの風景に心惹かれた気持ちなど、温かな家族の愛情や、稲作を大事に継承する郷土への愛着など、日頃の体験や出来事を生き生きと的確にとらえていました。

次世代を担う皆さんの意識の高さに、あらためて目を見張るとともに、日本農業の将来やごはん食を中心とした日本型食生活の継承に、大きな期待を抱くことができました。

この作品集をご覧いただく皆さまにおかれましても、子どもたちが全力で取組んだ作品を通じて、ごはん・お米の大切さや農業の価値について、あらためてお考えいただければ幸いです。

「ごはん・お米とわたし」作文・図画コンクールは来年度も実施を予定しております。皆さんの素晴らしい作品にまた出合えることを期待しております。

最後に、今回ご応募いただいた学校の先生方をはじめ、関係する皆さま方のご支援とご協力に感謝申しあげ、ごあいさつとさせていただきます。

図画部門
2部

いわてけんちじしょう
岩手県知事賞

「ババの育苗～小鳥にいたずらされないように～」

ちばこはる
千葉心遥

いちのせきしりつたきざわしょうがっこう ねん
一 関市立滝沢小学校 5年



図画部門
3部

いわてけんきょういくちょうしょう
岩手県教育長賞

「おかわりっ！」
いとうみやび
伊東雅美

いちのせきしりつおきたちゅうがっこう ねん
一関市立興田中学校 3年



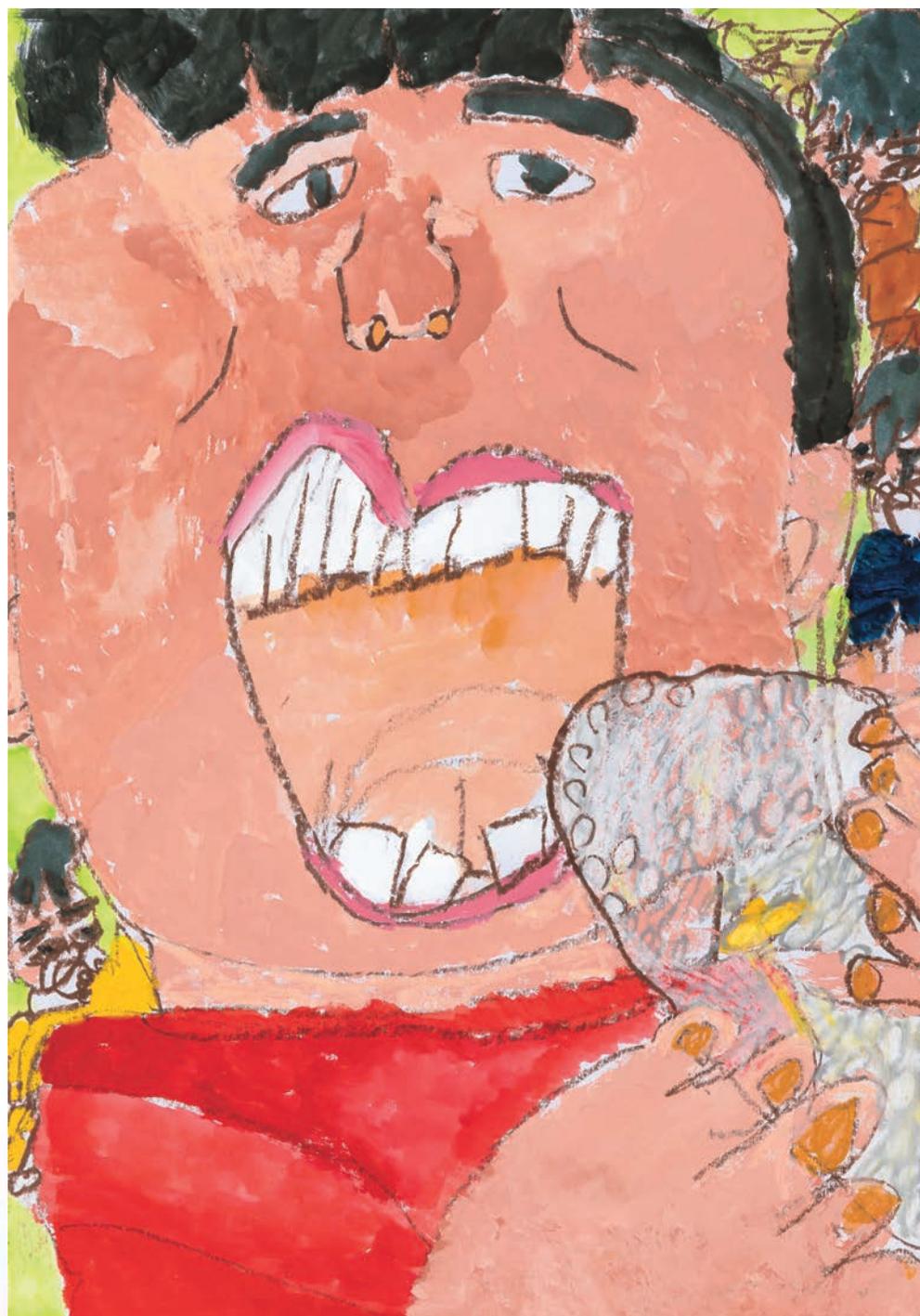
図画部門
1部

じえい いわて けんご れんかい ちようしやう
JA岩手県五連会長賞

「おにぎり大好き」

もり や り な
森 谷 璃 菜

かねがさき ちやうりつ だいいちしやうがっこう ねん
金ヶ崎町立第一小学校 2年



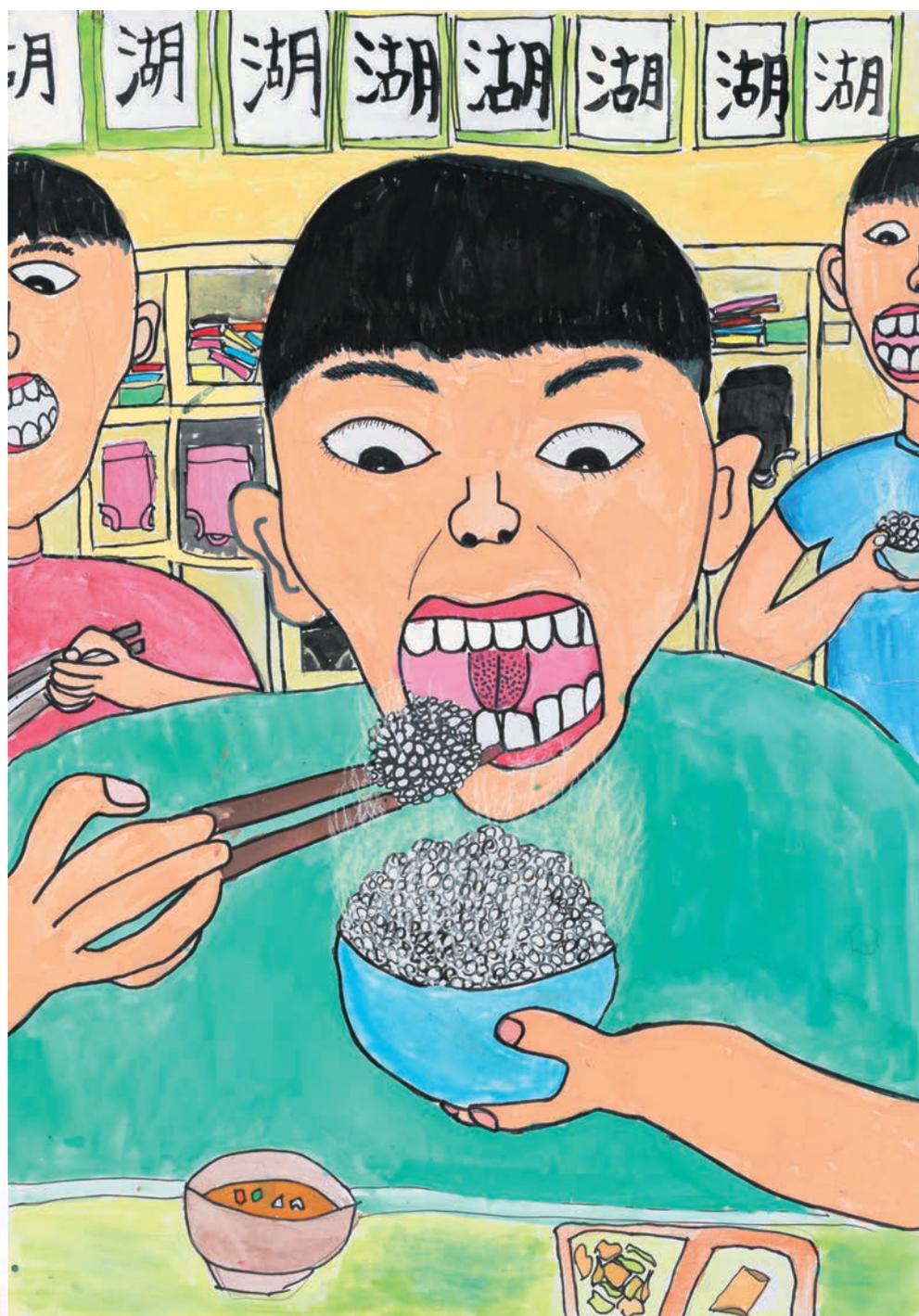
図画部門
2部

いっばんしゃだんほうじんいえ ひかりきょうかい
一般社団法人家の光協会
ほっかいどうとうほく ふ きゅうぶん か きょくちようしやう
北海道東北普及文化局長賞

「さあ、今日も完食だ！」

おだかわ こう
尾田川 凰

にのへしりつふくおかしょうがっこう ねん
二戸市立福岡小学校 6年



図画部門
2部

かぶしきがいしゃ にほんのうぎょうしんぶんとうほくし しょうしょう
株式会社日本農業新聞東北支所長賞

「にこにこ食べるとおいしいごはん！」

お やま り お
小 山 龍 桜

いわて けんりついちのせきせいめい しえんがっこう ねん
岩手県立一関清明支援学校 4年



図画部門
3部

ゆうしゅうしょう
優秀賞

「海よりも深い愛情を」

なかしまななこ
中島那々子

いちのせきしりつさくらまちゅうがっこう 2年
一関市立桜町中学校 2年



図画部門
3部

ゆうしゅうしょう
優秀賞

「おいしいおむすびつくるからね

(弟のために時々おむすびをつくります)」

うめ き りん こ
梅 木 凜 子

もりおか しりつものはしちゅうがっこう ねん
盛岡市立下橋中学校 1年



「田んぼの一年」

たまざわほなの
玉澤歩風乃

いちのせきしりつふじざわしょうがっこう
一関市立藤沢小学校 6年



春。まだまだ寒い春の田んぼは、どろどろの土で、田んぼというより畑みたい。しばらくたつと、水が張られて湖のようにきらきら輝く。その後、苗が植ええられる。その様子は、湖のようせいのように。でも、湖のようせいが見られるのは、ほんの少しの間だけ。すぐに、苗は、五月の桜の葉のような美しい緑になる。

夏。ぎらぎらの太陽の下にセミの鳴き声が聞こえる夏の田んぼ。風にふかれて、長くなった稲がゆれる。大きい水田の場合だと、風にふかれた稲が同じ方向に重なって、おもしろい。そのうち、稲につぶつぶができてくる。このつぶつぶの正体は、米。白米しか見たことがない人が見たら、「本当にお米なの」って、なると思うけれど、これは未来のお米。

秋。すずしい秋の田んぼは、緑と黄金が混じっている。米の部分は、黄金色。その下は、緑色。この稲を年で言ったら、五十九才かな。人間で言ったら、もうすぐでおいさん、おばあさんになりますよ、と言う所。だんだん稲が黄金色になって、田んぼは、平泉にある金色堂みたいにきらきら輝いているように見える。岩手の田んぼも世界遺産に登録してほしい。私は、それくらい秋の田んぼが大好き。冬。稲をかりとられてしまって、さみしそうで、寒そう。田んぼは、豊作の秋の田んぼと同じ物とは思えない。雪が降るまでは、静かでさびしい田んぼだ。雪が降ると、田んぼは、真っ白な世界。田んぼを雪かきする人なんて、あ

んまりいないし、雪の積もった田んぼの上をわざわざ歩く人もいない。皆の知っている田んぼとは、少し違うかもしれないけれど、これも田んぼを見る時の一つの楽しみかと思つた。

こんな感じに、田んぼは、一年中日に日に変化している。良く考えてみれば、田んぼの一年は、人間の一生のようだ。田んぼも人間も変化している。例えば、人間は背が伸びる。田んぼも稲が伸びる。人間も田んぼも同じよう。私は、雪の積もっていない時の、冬の田んぼは、好きじゃない。静かか元気がなくて、とつてもさびしそう。だから、好きじゃない。そんな時は、大好きな塩むすびを食べながら、「こうしておいしい塩むすびを食べられるのは、この田んぼが今あるからなんだ。」って、考えたら冬の田んぼだって、決してさびしい物じゃないと思えるような気がした。

もうすぐ、秋がやって来る。今年も、私が一年で一番大好きな田んぼの風景がやってくる。黄金色で、沢山の米を実らせた宝庫。宝庫が見られるのは、水田がこんなに身近にある岩手に住んでいるからだ。都会のおばあちゃんの家に行った時、水田は、一つも見なかった。都会って、何でもあると思つてたけれど、田舎にしかない物もあるんだ。お米って、おいしいけれど、その時、その時の風景が見る事のできる田んぼもいいよね。

「当たり前のごはん」

し みず あお ば
清 水 葵 葉

いわて だいがくきやういくがく ぶ ぶ ぞくちゆうがっこう
岩手大学教育学部附属中学校 3年



「今日のごはんは何？」

私が母に毎日決まって投げかける言葉である。

朝は時間がなく慌ただしく済ませるため、簡単かつバランス良く栄養が摂れるように、昼は放課後の部活動のことを考え、エネルギーを蓄えられるように、夜は一日の疲労が回復できるようにと、毎食献立を考えてくれる母。そんな母の口ぐせは、

「ごはんを食べないと力が湧かないから。」

である。よって、我が家の主食は決まってごはん。何となく母の言葉を素直に聞き入れたくなくて、パンや麺類を食べることもある。だが、なぜだかすぐにごはんを食べたいという欲望に駆られるから不思議だ。まるで、母の言葉の魔法にかかっているのかと疑ってしまうほど、私の食生活にごはんは欠かせない。

岩手で生まれ、毎日、岩手のお米を食べて育った私は、岩手のお米以外ごはんの味を食べ比べることなどあるわけなかった。

そんな時、兄が海外で暮らすようになり、岩手のごはんが恋しいと言ってきたことがあった。私は、海外でも日本米は売っているし、どこでどんなごはんを食べようと、ごはんの味に差はないだろうと思っていた。そして、それはお米の品質の違いだけではなく、ごはんのお供となる豊富な食材や家族で囲む食卓が、どれだけありがたいものなのか考えるきっかけとなった。

私が暮らす岩手県は、海・山・里の恵みが豊富で、栄養価の高い食材がたくさんある。小さい頃から、地元の食材をふんだんに使った食事を食べてきた私は、岩手県は美味しいものがたくさんある宝庫だと胸を張って言える自信がある。その良質で新鮮な食材とともに食べるごはんが一番のごちそうと思えるからだ。

炊きたての白いごはんの艶と輝き、様々な食べ方を楽しめる冷えても美味しいおにぎり、旬の食材で季節を感じられる炊き込みごはんやおこわ、バラエティに富んだもち料理。どれも絶品のごちそうであり、どんな時でも私に元気を与えてくれる。そして、それらのひとつひとつが家庭の味であり、代々受け継がれてきている食文化でもある。

当たり前のように食べている毎日のごはん。私たちは十三年前、震災を経験し、そして今、コロナ禍の中で食生活も当たり前が当たり前でなくなってきた。食べたい時に温かいごはんが食べられない、思うように家族揃って食卓を囲むことができないうなど、今、目の前の温かいごはんを頬張ろうとしている自分がどれだけ恵まれていることか。

昨今、インターネット上では「ポテサラ論争」が話題になった。性的役割分担や家事労働のあり方が問題視されているのだ。社会の変化とともに男女間や世代間での意識にも変化が見られるのは当然のことだと思う。私自身も日頃から社会情勢には敏感でありたいと思っているし、このような社会だからこそ、食文化の大切さも深く感じられる。

食生活について、世論で問題提起や議論されていることは様々あるが、個人の価値観も様々だ。そういった中でも、郷土の文化を伝承しながら、さらに私の身体のことを考えてごはんを作ってくれる家族の存在は唯一無二であり、何よりその毎日のごはんは私自身が幸せを感じているからこそ、その当たり前のごはんの美味しさや食文化を自らの手で後世に伝えていきたいと思っている。

兄が恋しいと言った「岩手のごはん」とは品質や豊富な食材はもちろんだが、温もりある手作りのごはんを家族揃って食べる喜びのことだったのかもしれない。

台所に立つ母に向かって投げかけるあの毎日の言葉を、今日は少し優しく語りかけてみよう。

「おかあさんにつくったおにぎり」

さ さ き たつ き
佐々木 樹 生

きたかみ しりつくろさわじりひがしやうがっこう
北上市立黒沢尻東小学校 2年



「おにいちゃん、おかあさんにおにぎりつくろう。」

前、ぼくがお母さんにおにぎりをつくってあげたのを思い出したのか、弟がいきなり言い出しました。それで、弟と日曜日の朝につくることにしました。お母さんが、前の日に

「あしたは、九時までねてる！」

とせんげんしたので、チャンスだと思いました。ごはんは、お母さんがいつものように前の日すいはんきにセットしてくれたので、たくことはありません。お父さんに、おこしでもらうことにしました。朝がきました。

「たつき、六時だぞ。おにぎりつくるんだろ。」

と、お父さん。弟はねむそうな目をこすりながらおきてきました。

まず手を洗って、すいはんきのふたを開けました。ゆげといっしょに、おいしそうながはんのかおりが出てきました。

「お母さんはさげがすきだぞ。」

とお父さんに言われたけど、なかったのでさげのふりかけをごはんにまぜました。つぎにしゃもじでまぜて、広げて

おいたラップの上にごはんをのせます。それから、ラップでくるんでぎゅっぎゅつとにぎりました。あつくてたいへんでした。弟も、がんばってにぎりました。ごはんがこぼれたけど、

「たのしいね。」

って弟がいました。二つずつつくって四こできました。大きさも形もばらばらでしたが、できたてのおにぎりはとてもおいしそうでした。それに、がんばってつくったのでいい気持ちでした。おきてきたお母さんは、

「二人でつくってくれたの、ありがとう。」

といって、すぐにおいしそうにたべてくれてぼくは、とてもうれしかったです。

お母さんは、毎日ぼくたちのためにごはんのしたくをしているんだ、と思ったら、弟とまたつくってあげたいと思いました。

いっばんしゃだんほうじんいえ ひかりきょうかい
一般社団法人家の光協会
ほっかいどうとうほく ふ きゅうぶん か きょくちょうしやう
北海道東北普及文化局長賞

「おにぎりの力」

たか はし き りん
高橋 稀 琳

いわて だいがくきょういっくがく ぶ ぶ ぞくちゅうがっこう ねん
岩手大学教育学部附属中学校 3年



私の勝負飯。それはおにぎりだ。
十年前、私は仙台市に住んでいた。私は父の仕事で引越すことが多かった。仙台に来たのは私が生まれてから三回目の引越しの時だった。

幼稚園に通うのも慣れ、新しく友達ができ、東日本大震災によって当たり前に満たされていた生活が一変した。思う存分友達と遊んで、お腹がいっぱいになるまでご飯を食べて、朝までぐっすり寝ていた毎日は一瞬のうちに奪われた。当時、三歳の幼い私は何が起こったのか分からず、ただいつもと違うということが怖かった。

電気はもちろん、水道、ガスなどのあらゆるライフラインが途絶えた。
「ママ、お腹空いた。」

この苦しい状況の中、幼い私があるのままだに言う言葉は母を困らせた。食料を手に入れるためにスーパーに長時間並んで、缶詰や魚肉ソーセージを得た。数え切れないほどの人が集まる様子はまるでデイズニードのようだったと母は言った。災害に備えて備蓄していた食材もあったがそれでも厳しい生活だった。

そんな中、仙台に来る前に住んでいた岩手の両親の知人が私たち家族を心配し、応援のメッセージが書き込まれたダンボールいっぱいには水やお米、ガスボンベなどを詰めて持ってきてくれた。高速道路が封鎖され、ガソリンを手に入れるのにも一苦労であるのに私たちのために届けてくれた。岩手から届いた水とお米で母は私におにぎりを握ってくれた。当然、おにぎりの具になるものやのりはなく、ただの真っ白いおにぎりだった。それでも久しぶりに食べるお米の味は私を安心させてくれた。数日前までは当たり前のように食べられていたお米なのに特別な味がした。こんなにもお米は甘かったのかとしみじみ思った。いつもの倍以上に

よく噛んでゆっくり食べたあのおにぎりの味は十年たった今も覚えている。

それからしばらくの食事は母が作ってくれるおにぎりほとんどだった。のりやふりかけが手に入るようになると、母は私のおにぎりにだけのりやふりかけをつけてくれた。毎日毎日朝も昼も夜もおにぎりを食べていたのに飽きることはなく、むしろ欠かせないものになっていった。お風呂に入れないのはもちろんだが、夜になっても電気がつかない暗闇がとても怖かった。ろうそくの火に包まれながら食べたおにぎりはいつでも私を安心させた。精神的に支えてくれた。おにぎりを食べると元気になった。おにぎりを食べるとホッとした気持ちになった。おにぎりは苦しい状況でも私を幸せな気持ちにさせてくれた。

それから一年も経たないうちに仙台を去ることになった。そして今は盛岡で暮らしている。あの出来事以降もおにぎりは私の大好物だ。学校のお弁当にたくさんのおにぎりを作ってほしいと母にリクエストするが、きちんとバランスよく肉も野菜も食べなさいと言われて、作ってくれないことも多い。でも、運動会やテストの日だけはおにぎりしてくれる。おにぎりが私にとって元気の出る特別な食べ物だということを母は知っているからだろう。私のこ一番の日はいつもおにぎりなのだ。

おにぎりが大好きな私ももう中学三年生。来年には今までの人生で一番大きな勝負である高校入試が控えている。三月八日のおにぎりの具は何だろう。鮭か、たらこか、ふりかけか……。炊き込みご飯かもしれない。唐揚げが入っていたりして……。

私の勝負飯はおにぎりである。力の源であり、戦友である。

「しおむすび」

きく ち りん か
菊 池 梨 花

おうしゅうしりつ きぎくしょうがっこう 2ねん
奥州市立木細工小学校 2年



「よおし、おにぎりつくるぞ。」

わたしは、立ち上がりながらばあちゃんに言いました。お昼の時間になったのに、まだごはんのじゅんぴができていなかったからです。ばあちゃんは、

「いいよ。おいしくつくって。」

とこたえてくれました。わたしは、やる気まんまんでどころに行きました。

はじめに、すいはんきからほんのり黄色いごはんをボウルに入れました。いいにおいがしました。

つぎに、しおをふりかけました。前にママから少しずつびんをふってかけることを教えてもらっていたので、気をつけてサツサツとごはんの上にふりました。そして、スプーンでよこから上の方にまぜました。しおのにおいがしてきて、おいしくできるといいなと思いました。

さい後に、ラップを広げて、ごはんをのせました。丸いボールをもっているかのようにりょう手をギュッギュッと丸めながら力を入れました。そのとき、

「あんまり力を入れすぎないでね。」

とママに教えてもらったことを思い出したので、にぎるのをやめて手のひらで形をととのえて、きれいなさんかくにしました。

「できたよ。」

わたしは、大きな声でみんなをよびました。

「おいしい。りんは、じょうずだね。」

ばあちゃんがほめてくれました。

「うん、おいしいね。」

ママもよろこんでくれました。わたしもたべてみたら、しおかげんがちょうどよくて、とつてもおいしかったです。ニコニコしながらたべている二人を見て、つくってよかったなと思いました。

みんながよろこんでくれたので、またつくって、みんなで楽しくたべたいです。

「小さな体験から…」

新田透子

北上市立黒沢尻西小学校 4年



「お米ちょうだい。」

我が家にお米がなくなると、となりのおじいちゃんの家に行ってもらってくるのが、いつの日からか私の役割になっていく。

我が家にお米がなくなる頃、おじいちゃんが、もみを精米して準備してしてくれる。だから、おじいちゃんの家のお米はいつ食べてもおいしい。

「おいしい」が、あまりにも当り前になっていたので、お米を作る人の気持ちや大変さなど何も知らずに食べていた。

去年の春、お父さんが急に

「今日は田植えの手伝いに行くぞ。」
と言いだした。

お父さんとお兄ちゃん、私の三人は苗を運んだり、田んぼのすみに手植えをする作業だった。

秋になったら、自分達が植えた所の稲刈りをしてほしいと、おじいちゃんは考えたようだ。

初めての田植え、思っていた様には全くいかなかった。

お父さんは服も汚さず、スワットと手ぎわよく進んで行くのに、お兄ちゃんと私は、田んぼに入ったとたん、足が抜けなくなつて一歩も進めない。お父さんに助けてもらっても、長くつだけ脱げて、ズボンや服は泥だらけ。

少し進めるようになったものの、苗の数が一定でなかったり、深くさし過ぎたりと、数列終わってみれば、お父さんのやった列と、お兄ちゃんと私のやった列は、一目で分かる出来。それでも、やり終えた事には大満足。

お昼には、おばあちゃんとお母さんがおにぎりをぎぎぎって持ってきてくれた。おにぎりとお茶、おかずはいらなかった。

今年の春頃、お父さんといっしょに、庭に小さな畑を作った。

夏には、オクラやシトウなど色々収穫した。少々色や形が悪くても全部食べた。

野菜を残さず食べながら、ふと、おばあちゃんの言葉が浮んだ。

「お茶わんのご飯つぶ全部はだけて。」

私がおばあちゃんの家でご飯を食べた後、必ず注意されていた言葉。

「みつともないでしょ。」

と、おばあちゃんが言っていたけれど、もしかして、おじいちゃんが一生けん命作ったお米だから、ていねいに食べてほしいと思つて言っていたのかもしれない。

私はほんの少しだけのお手伝いだったから、田植えを楽しんで終わる事が出来たけれど、おじいちゃんは毎日田んぼの様子を見ながら、お米が出来るまで、水の管理や草刈り、葉の散布などなど、たくさんの仕事をこなす、その上、自然災害にも負けないようにくふうしてやつの思いでお米を作り上げているのだ。

自分が手をかけて初めて知ったこの感覚、この小さな体験から学んだ事を大切にしたい。

「お米愛」

たむら まさと
田村 真佐斗

はちまんたいしりつまつおちゅうがっこう
八幡平市立松尾中学校 2年



僕たちは毎日おいしいお米を食べている。僕は、毎日外で農作業をしている。草が生えた畑を耕しに行ったり、田んぼの水回りに行く仕事、草刈りや野菜への水やり、冬は早朝の除雪作業、定期的な農機具整備、収量の計算など畑、田作業の他にも面積を求める計算もしている。僕は小さい頃から米作りが大好きだ。そして自分は毎年稲刈りの時期が好きだ。自分は田んぼの四隅にある稲を手刈りする仕事をやっている。その他にもコンバインに乗ったり、籾を乾燥施設に持つていくのにいっしょにトラックに乗ったりしている。

ただ、米作りも楽しいことだけではない。田植え前の苗管理や田んぼの雑草の除草作業など同じ姿勢が長い時間続いたり、重労働な作業がある。自分も作業していて思う。米づくりは楽しくできる仕事ではないということを知った。

そして自分はよく学校の給食でご飯を全部食べず残してしまうことがある。でもそれはダメなことだと思った。その少しの量でもとても大切に育てて取れたお米だから、残すのは農家としてダメなことだと思った。

クラス内でも、もしかしたらお米を残している人がいるかもしれない。ご飯以外にも同じだ。野菜なども作ってくれた人に対して美味しくないなど言うのは、作ってくれた人からするととても悲しい気持ちになるだろう。農家をしていない人も、作ってくれた人に対して感謝の気持ちを持つ努力も必要だと思う。

自分は将来農家を継ぐつもりだ。そのため今から農業のことをいろいろ調べていきたいと思っている。さらに農地の面積を増やし、たくさんのお米を作り世界中のみんなに届けたいと思っている。

そして自分で作った作物をみんなに食べてもらう時に、美味しいと言っている笑顔を見たい。

お米だけじゃなく野菜や魚などにもしっかりと感謝の気持ちをもってご飯を食べることが大切だと感じている。もちろん農作物を作ってくれた「人」にも感謝の気持ちは必要だ。

ただそれだけではないと思う。農作業で使うもの、それは、「農業機械」だ。農機具だって畑、田を耕す機械、田に苗を植える機械、そして稲を刈り取ってくれる機械など、いろいろ機械がある。

もし、その米作りに欠かせない農機具が故障してしまったりしたらどうだろう。それだけでも美味しい農作物は収穫できない。そうやって故障してしまった農機具を直し修理をして下さる人、その人たちにも感謝しないといけない。もしその修理の人が誰一人もいなかったらどうだろう。壊れてしまった機械が使えなくなる、やがて何も動かない、使えないということになってしまう。このようなことが起きないようにするためにどうしたらよいだろう。

それは、常に農機具の整備をすることだ。機械の部位の名前が分からないし、雑布で軽く全体を拭くなどばかりと誰でもできると思う。そういうことを毎日やっている農家さんの機械は、何年使っても壊れないはずだ。最近、自分の作業が終わると、心の中でお疲れさまと言っている。その後には洗車をして、車庫に入れる。

そこまでやると自分まで嬉しくなってくる。お米を通して学んだこと。それは、作ってくれた人への感謝と、人だけでなく物へにも感謝の気持ちを持つということ。

そして、自分は感じた。農機具や人に優しくしっかり感謝の気持ちを伝えられる人になりたい。それが農家の本当の一人前だということを。これからはこの気持ちを忘れず未来農業への新たな第一歩を踏み出そうと思った。

明日の日曜日、ほくは田んぼの除草作業をする予定だ。きつと足と腕が疲れるぞ。

総評

審査委員長



元岩手県教育委員会
教育委員長
八重樫 勝

八重樫

勝

第四十六回「ごはん・お米とわたし」作文・図画全国コンクールは、新型コロナウイルス感染症が心配される中、主催者の皆さんの多大な配慮により、立派に開催されました。

岩手県コンクールは昨年も実施されましたし、今年も多く応募がありました。このコンクールに寄せる児童生徒の皆さんや先生方、家族の皆さんの期待の大きさと、うれしく感じています。

全国コンクールでは上位の入賞はありませんでしたが、作文・図画それぞれの部門で優秀賞一点ずつの受賞がありました。岩手の作品のレベルの高さが評価されたものです。

作品全体を通して、「ごはん・おにぎりのパワー、食品ロスなどが問題になっている中で食べ物を大切にすること、家族仲良く働くことなどについて、しっかりと物事をとらえ、考えて表現していました。小中学生の皆さんの健全な成長ぶりが感じられました。

《作文の部》

〈1部〉

・「ごはんやお米にまつわる「出来事」が「家族とのふれあい」を通して、素直な表現でまとめられている。

・様子を表す語、時間や事柄の順序を表す語を適切に用いて、読み手によく伝わるように書き表されている。

〈2部〉

・「ごはんやお米に対する「思いや考え」を「自分の

体験」を通して、文章の組み立てを工夫しながらまとめている。

・書き出しの工夫や効果的な構成で読み手を引き付ける作品、五感を使った表現や会話文の多用で臨場感を与える作品が増えている。

〈3部〉

・食にまつわるエピソードを通して「食や家族に対する感謝の念」「稲作文化や日本食への尊敬の念」が、構成や表現の工夫によって効果的に表現されている。

・家族の在り方や自己の生き方を見つめ直したり考えを深めたりしている作品が多い。

《図画の部》

・コロナ禍といわれる不安な社会の中で、子ども達の澄んだ心や豊かな感性は健在で、作品の中に溢れていたことに安心した。また、昨年よりもたくさん応募があったこともうれしいことであった。

・小中学生とも、ご飯大好きという気持ちが伝わってくるすばらしい作品ばかりだった。

〈1部〉

・おにぎりやご飯がおいしいという気持ちが画面いっぱい楽しい雰囲気や描かれており、背景にはお母さんや家族のやさしさ、家族との触れ合いが感じられた。

〈2部〉

・教室での楽しい給食の様子が伝わる作品がたくさんあった。黙食をしなければならぬ中で、子ども達の収束を願う気持ちを感じ取ることができた。

〈3部〉

・ご飯やお米を捉える視点に中学生らしい広がりが見られた。場面設定や画面構成に工夫があり、色遣いが豊かで細部まで丁寧に描いていた。

・新型コロナウイルスの収束はまだ見通せませんが、感染対策を忠実に守り、元気で生活してください。来年もたくさんのお応募を期待しています。

図画部門を審査して



盛岡市立下橋中学校
指導教諭
佐々木 俊江

佐々木

俊江

図画作品の審査を通して、子供たちの澄んだ心や豊かな感性を感じることができました。コロナ禍の不安の多い世の中に光を差してくれたようで、とても幸せな気持ちになりました。作品を応募してくださったみなさんに感謝いたします。また今回は、昨年度よりもたくさん作品が集まり、ご家族や学校のご協力にも感謝したいと思います。そして、素晴らしい作品ばかりで審査は大変難しかったことを申し添えます。

その中でも岩手県知事賞を受賞した千葉心遥さん（二関市立滝沢小学校5年）の「ババの育苗く小鳥にいたずらされないように」は、おばあさんが大切に苗を育てている場面設定が素晴らしく、人物や背景の描写が大変優れた作品です。丁寧に色を重ねて描かれた様子や全体の温かな色使いから作者のおばあさんを思う気持ちや優しさが伝わる素晴らしい作品です。

岩手県教育長賞を受賞した伊東雅美さん（一関市立興田中学校3年）の「おかわりっ!」は、おいしいそうにごはんを食べる二人の表情が最高に素敵な作品です。おいしいおかわりっ!と家族で仲良く食べる夕食の様子が細かく描かれている作品です。

J A 岩手県五連会長賞を受賞した森谷璃菜さん（金ケ崎町立第一小学校2年）の「おにぎり大好き」は、画面いっぱいのにびのにびと描かれた素晴らしい作品です。大きな口で、今にもおにぎりをほうばりそうに臨場感あふれる作品です。

家の光協会北海道東北普及文化局長賞を受賞した

尾田川鳳さん（二戸市立福岡小学校6年）の「さあ、今日も完食だ！」は、学校でのわくわくするような給食の様子が表情からも伝わる作品です。湯気の描写にも工夫が見られ、ほかほかごはんの表現が素晴らしいです。

日本農業新聞東北支所長賞を受賞した小山龍桜さん（岩手県立一関清明支援学校4年）の「ここに食べるおいしいごはん！」は、ごはんを食べようとする時のうれしそうなお表情が素晴らしい作品です。ごはんの一粒一粒まで丁寧に表現していて、おいしさが伝わってきます。

優秀賞を受賞した中島那々子さん（一関市立桜町中学校2年）の「海よりも深い愛情を」は、心を込めて田植えを行っている作者の思いが伝わる作品です。絵の具のグラデーションを使って遠近感も表現している素晴らしい作品です。

同じく優秀賞を受賞した梅木凜子さん（盛岡市立下橋中学校1年）の「おいしいおむすびつくるからね」は、小さい弟のお弁当と一緒につくりながらお手伝いをする、お姉さんとしての優しい作者の様子が伝わる作品です。温かな表情の描写も素晴らしいです。

学校奨励賞を受賞した金ヶ崎町立第一小学校さんは、力強くいきいきとした作品ばかりで、どれも力作と高く評価されました。

図画作品が生み出される背景には、いつも温かく見守ってくださるご家族や先生方の姿が感じられます。作品に登場する人物の「ごはんやお米が大好き」という気持ちや表情や場面の様子から伝わってくる素晴らしい作品が今後もたくさん生み出されることを期待しています。

作文部門を審査して



盛岡市教育委員会
学校教育課 指導主事
山 下 るり子

本作文コンクールに、今年度も多くの学校、児童生徒の皆さんが応募してくださいました。どの作品も、自分の生活と「ごはん・お米」との関わりについて、五感を通して感じたこと、考えたことをしっかりと綴っていることに嬉しさを感じます。

岩手県知事賞を受賞した玉澤歩風乃さん（一関市立藤沢小学校6年）の「田んぼの一年」は、四季折々に見える田んぼの美しい姿が色彩語や擬態語等を巧みに使って表現されており、まるで四枚の絵画を見ているような気持ちになる作品です。田んぼを「人間の一生」に例え、「田舎にしかない物」と誇る展開も秀逸で、歩風乃さんの郷土に対する深い愛情を感じます。

岩手県教育長賞を受賞した清水葵葉さん（岩手大学教育学部附属中学校3年）の「当たり前のごはん」は、食事にまつわる母や兄とのエピソードから家族や郷土について再認識し、食文化を広い視野で見つめ直す堅実な作品です。「少し」という言葉で変わろうとする自分の背を押す葵葉さんの成長を喜ぶ読み手に、余韻の心地よさを与える最後の一文も魅力的です。

J A 岩手県五連会長賞を受賞した佐々木樹生さん（北上市立黒沢尻東小学校2年）の「おおかあさんにつくったおにぎり」は、八百字に様々なドラマが見える作品です。樹生さんの思いやり、兄に憧れる弟の成長、兄弟の睦まじさ、ご両親の深い愛情。家族で築いたこれまでの幸せが、樹生さんの目線で朝のひと時に凝縮され、素直な表現でまとめられています。家の光協会北海道東北普及文化局長賞を受賞した

高橋稀琳さん（岩手大学教育学部附属中学校3年）の「おにぎりの力」は、おにぎりに救われ心の支えとなっていることを震災の経験や自分の成長を通して前向きに捉え、食や母親への感謝の念を誠実にまとめた作品です。次なる目標に立ち向かおうとする決意の強さが「戦友」に表れており、頼もしさを感じます。

日本農業新聞東北支所長賞を受賞した菊池梨花さん（奥州市立木細工小学校2年）の「しおむすび」は、色・形・音・温度・香りが伝わる五感を使った表現が多く、情景が目には浮かびます。親子三代の会話も、声の温かさとともに聞こえてくるようです。小さな手で握ったおいしいおにぎりもたらす「幸せ」を読み手も一緒に味わえる心温まる作品です。

優秀賞を受賞した新田透子さん（北上市立黒沢尻小学校4年）の「小さな体験から」は、稲作の体験を通して知った苦労や喜びにより、家族の言葉の意味やお米に対する思いについて気付いていくというしっかりとした展開で誠実な思いが素直にまとめられた作品です。

同じく優秀賞を受賞した田村真佐斗さん（八幡平市立松尾中学校2年）の「お米愛」は、農作業の経験が基盤にあるため、農業や農機具に対する思いや主張に説得力がある作品です。農業に対する情熱と作業後の爽快感が端的に表れた段落でまとめる構成も秀逸です。

学校奨励賞は、宮古市立津軽石中学校です。全年における丁寧な指導の継続により、応募作品の全てが、文章構成や表現の優れた作品であることが高く評価されました。

入賞作品は勿論のこと、応募された多くの作品から、日本の主食であるお米への感謝の気持ち、温かな家族への愛情、そして、稲作を大事に継承する郷土への愛着がよく伝わってきました。今後も、多くの子どもたちが主体的に「ごはん・お米」に関する様々な体験を行い、表現する機会を大切にしてください。

〔全国コンクール〕

◆**優秀賞**

千葉 心 遙 一関市立滝沢小学校 5年 「ババの育苗〜小鳥にいたずらされないように〜」

〔岩手県コンクール〕

◆**岩手県知事賞**

千葉 心 遙 一関市立滝沢小学校 5年 「ババの育苗〜小鳥にいたずらされないように〜」

◆**岩手県教育長賞**

伊東 雅 美 一関市立興田中学校 3年 「おかわりっ！」

◆**JA岩手県五連会長賞**

森 谷 璃 菜 金ヶ崎町立第一小学校 2年 「おにぎり大好き」

◆**一般社団法人家の光協会北海道東北普及文化局長賞**

尾田川 風 二戸市立福岡小学校 6年 「さあ、今日も完食だ！」

◆**株式会社日本農業新聞東北支所長賞**

小山 龍 桜 岩手県立一関清明支援学校 4年 「にこにこ食べるとおいしいごはん！」

◆**優秀賞**

中 島 那 々 子 一関市立桜町中学校 2年 「海よりも深い愛情を」

梅 木 凜 子 盛岡市立下橋中学校 1年 「おいしいおむすびつくるからね」

◆**学校奨励賞**

金ヶ崎町立第一小学校
 (弟のために時々おむすびをつくります)

◆佳作

〔1部〕

深澤愛依紗 湯田小

2年

「おいしくなあれ

おにぎりにぎにぎ」

菅井 菜央 黒沢尻東小

3年

「米料理はこんなにあるよ」

千葉 心結 平泉小

2年

「おこめとわたし」

大崎 航佑 江刺家小

1年

「おにぎり大すき」

玉澤璃知佳 藤沢小

2年

「田んぼの少女」

林 大雅 一関小

2年

「自然の恵みとお米に感謝」

三浦 颯 一関清明

3年

「コンバインで

支援学校

稲刈りをする人」

久保田結友 矢沢小

1年

「おいしいご飯、大好き」

〔2部〕

小館 華唯 福岡小

6年

「大好きごはん

いただきます！」

鈴木 大翔 福岡小

6年

「いっしょにおにぎり

作ろう」

明堂 燕 飯岡小

6年

「お米に気持ちをこめて」

芳田 苺 一本木小

6年

「午後の元気はこのお米」

佐藤 蓮 真城小

5年

「みんなでたのしい給食」

深澤蒼粹羅 湯田小

4年

「稲を運ぶのがんばるぞ」

〔3部〕

佐々木虹羽 萩荘中

3年

「お米とわたし」

渡邊 優陽 葛巻中

2年

「ありがとう」

下道 莉緒 桜町中

2年

「バケツイネ」

木村沙里絃 見前中

2年

「自衛隊さんからの贈り物」

安部 結香 遠野東中

3年

「おいしい命のお米」

佐藤 遥菜 前沢中

1年

「おかわり！」

〔全国コンクール〕

◆優秀賞

玉澤 歩風乃 一関市立藤沢小学校 6年 「田んぼの一年」

〔岩手県コンクール〕

◆岩手県知事賞

玉澤 歩風乃 一関市立藤沢小学校 6年 「田んぼの一年」

◆岩手県教育長賞

清水 葵葉 岩手大学教育学部附属中学校 3年 「当たり前のごはん」

◆JA岩手県五連会長賞

佐々木 樹生 北上市立黒沢尻東小学校 2年 「おかあさんにつくったおにぎり」

◆一般社団法人家の光協会北海道東北普及文化局長賞

高橋 稀琳 岩手大学教育学部附属中学校 3年 「おにぎりの力」

◆株式会社日本農業新聞東北支所長賞

菊池 梨花 奥州市立木細工小学校 2年 「しおむすび」

◆優秀賞

新田 透子 北上市立黒沢尻西小学校 4年 「小さな体験から…」

田村 真佐斗 八幡平市立松尾中学校 2年 「お米愛」

◆学校奨励賞

宮古市立津軽石中学校

◆佳作

〔1部〕

平野 成 黒沢尻東小 3年 「おばあちゃんのおいしいごはん」

おいしいごはん

平沢 慶佳 一関小 3年 「お米の変身」

菊池 咲心 木細工小 2年 「あじつけごはん」

菊池 結心 木細工小 3年 「はじめてのごはんたき」

玉澤璃知佳 藤沢小 2年 「ミラクルごはんパワー」

中居紫陽里 黒沢尻東小 2年 「もりもりたべるよ」

伊藤友梨亜 湯本小 1年 「わたしのだいすきな

おこめ」

〔2部〕

菊池由佳莉 木細工小 4年 「米作り」

菊池 哉多 東和小 5年 「ぼくたちのおやつ」

芦萱 陽菜 舞川小 5年 「陸稲の希望の星

〜ウガンダ〜」

星 湊都 江釣子小 4年 「お米の仕組み」

吉田 羽那 江釣子小 4年 「まほうのお米」

及川 枝真 東和小 5年 「お米の秘密〜日本の

お米を守るために〜」

及川 悠生 江釣子小 4年 「おいしい米作り」

〔3部〕

及川 由唯 和賀東中 2年 「いっぺけ」

中田 晴日 桜町中 3年 「バケツ稲を通して」

千葉 優華 岩手大学教育 2年 「米は輝く」

学部附属中

盛合 華代 津軽石中 3年 「四季のお米」

佐々木亮輔 津軽石中 3年 「私の力と心の源」

堀内 星椰 金田一中 2年 「私は炊飯係」

第46回「ごはん・お米とわたし」 作文・図画岩手県コンクールの概要

応募点数

学校	作文	図画	合計
小学校	26	207	233
中学校	82	19	101
計	108	226	334

応募締切日

令和3年9月3日(金)

第1次審査会

令和3年10月14日(木)

第2次審査会

令和3年12月14日(火)

主催

岩手県内JA・JA岩手県中央会

後援

岩手県(農林水産部県産米戦略室)・岩手県教育委員会
いわてのお米ブランド化生産販売戦略推進協議会
一般社団法人家の光協会北海道東北普及文化局・株式会社日本農業新聞東北支所
JA岩手県信連・JA岩手県厚生連・JA全農いわて・JA共済連岩手

審査員(敬称略)

審査委員長	八重樫 勝	元岩手県教育委員会教育委員長
専門審査委員	佐々木 俊江	盛岡市立下橋中学校指導教諭
専門審査委員	山下 るり子	盛岡市教育委員会学校教育課指導主事
審査委員	佐藤 実	岩手県農林水産部県産米戦略室県産米戦略監
審査委員	北川 司	(一社)家の光協会北海道東北普及文化局局长
審査委員	小島 慶太	(株)日本農業新聞東北支所副支所長
審査委員	荒木田 裕樹	JA岩手県信連代表理事専務
審査委員	藤尾 芳彦	JA岩手県厚生連常務理事
審査委員	杉村 靖	JA全農いわて米穀部次長
審査委員	菊池 秀峰	JA共済連岩手県副本部長
審査委員	後藤 元夫	JA岩手県中央会副会長理事

※このコンクールに対するご意見・ご感想をお待ちしております。

JA岩手県中央会 JA支援部[組織広報班] 〒020-0022 盛岡市大通一丁目2番1号 TEL019-626-8519
ホームページ <https://ja-iwate.or.jp/> Eメールアドレス kouhou@jaiwate.or.jp